



ハルフォード・ジョン・マッキンダー
著

『マッキンダーの地政学
—デモクラシーの
理想と現実—』

古典への苦手意識はあったが、お客様から地政学リスクについてお問い合わせを受けることが増えたので、思い切って年末年始で読んでみた。すると、「今」に通じる警句に満ちており、感化されやすい私は皆さんにどうしてもご紹介したくなった。「本棚」では話題の近刊を紹介するのが通例だが、ロシアによるウクライナ侵攻が2年を超え、日本周辺の安全保障環境も悪化するなかで、異例の対応にご理解賜りたい。

本書の原書「Democratic Ideals and Reality」は1919年に発行された。訳者あとがきによると、geo politicsという単語は当時既に存在したにもかかわらず、原書には一か所も使われていない。故に、原書のタイトルにも本文にも「地政学」という単語が出現しない。それでいて中身は地政学そのもの、という面白い書だ。(本書タイトルの前半部分「マッキンダーの地政学」は日本語版の新装復刊時に出版社が付加した。)

私は大学で国際関係論や国際法をかじったりしたが、なぜかこの本に当時巡り合っていない。ただ、本書が講義で使われていたら面白さにハマってしまって進路が変わっていたかもしれないので、結果オーライ。

前置きが長くなったが、本書のエッセンスを私なりに表現すると、ユーラシア大陸の真ん中の「ハートランド」の勢力(ランド・パワー)が周辺へ進出する運動を繰り返し、東西の歴史の重大事件が形作られてきたこと。それは太古より変わらぬ地理的要素が規定し、今後も繰り返されるだろう、になる。

特に今の文脈にあてはめると、ロシアのウクライナ侵攻は、仮に食い止められたとしてもそれで解決ということではなく、周囲の国は警戒を続けなければならない、となるか。

経済雑誌の地政学特集などでは本書もよく取り上げられるので、このエッセンスだけお示しても、そんなこと知っているけど?となるのが関の山。ただ、マッキンダーの思考を身体化されたい方には、やはり手に取ってもらいたい。(以降、ネタバレ注意)。これまでのことを振り返っているのだなと読んでみると、「今後、国際連盟がバルト海および黒海から眼を離せる時期はおそらく永久にこないだろう。というのも、ハートランドは極めて強力な軍国主義の基盤になりうるからだ」(P193 第六章)と、予言めいた表現に接して心が震えてしまうのだ。書かれたのは100年前なのに、どうして?という具合。こういうことが何回か起こる。

著された当時は第一次世界大戦直後。平和建設への理想が語られつつも、国際連盟の機能不全を見通したような箇所も多い。また、敗戦国ドイツの台頭への警戒も強く残る。彼なりの処方箋を説いているのだが、現実政治は彼の危惧した通りに展開し、20年後に人類はまたも戦禍に見舞われる。マッキンダーが凄過ぎて例外ということなの

か、結局、人類は教訓を活かせなかった。

マッキンダーの慧眼を感じるのは、他にも、例えば、「第四章 内陸の人間の世界像」の交通網・ロジスティックスの軍事的側面の考察などで、100年後だからこそ身に沁みる。鉄道の発展により、海岸への機動的な軍事力輸送が容易になり、徐々にハートランドが戦略的に有利になってくるとの予想が立てられている。ロシアがシー・パワーに対抗する力となりうるとの観点からの考察だ。ただ、目立つ実践例は思いだせない。むしろここは、現代の中国の「一带一路」にロシアはお株を奪われたな、と思いつつ読んでいた。

別のことも連想する。ウクライナ侵攻以降、日本の欧州線はロシア上空を通過できず、アラスカと北極点経由の大回りを強いられる。幸い、航空機の性能進化で中継地に降りる必要まではないが、ロシアの大きさを今思い知らされている形だ。また、台湾有事関係でしばしば指摘される「航空優勢も地上基地あってこそ」という論点を違った形で意識させられる箇所でもある。

同時に、温暖化による北極航路の開発で、沿岸を支配するロシアの立場は強くなっているように見えて、ロシア北部の海岸線がついに他国の海軍力（シー・パワー）に晒される日が近づいているという面の両方あるな、と勝手な解釈をしながら読み進めた。100年前のさらにそれ以前の話だけでなく、当時の最新の状況を踏まえていることで、私も、同じような流儀で妄想をさせてもらった。今でこそ、中国の「超限戦」理論、ハイブリッド戦争など少し様相が変わってきたとはいえ、地理が国家間競争の基礎的な条件を規定する点是不変だ。本書

が現代人にも示唆を与え続けられるゆえんか。

タイトルに後で付加された「地政学」よりも、最初から入っていた「デモクラシーの理想と現実」の方に強く関係する部分にも触れておこう。「今後、世界の各国民を満足させるためには、それぞれの国家的発展にとって今少し平等な機会が与えられるように、われわれは努力すべきだとおもう。」(P213 第六章)は、内政の不満が国家間紛争につながることから、国家間不均衡を生じさせるレッセフェール型の自由貿易主義にくぎを刺す。また、「地方生活が固有の価値や面白みを失ったことはあくまでも事実である。」(P223 第七章)と、都市と地域の不均衡な発展を嘆く。何事も包括的にとらえようとするマッキンダーの姿勢には敬意を表したい。ただ、本書を有名たらしめているのはこれらではおそらくなく、地政学の部分なのだろう。

かように、読み応え十分なので本書をお勧めしているのだが、注意点がある。地名表記が歴史的なのだ。例えば「バルチスタン」(P90)。手元の帝国書院の地図帖では「バルーチスタン」。日本地図の「越中」とかの令制国のような明朝体の表記をイメージいただきたい。なので、横においた地図帖と歴史用語集を根気よく引く読書体験となることを覚悟してください。世界史と地理を選択した諸兄には、ほろ苦い思い出の詰まった「あの頃」の追体験とも言えますかね。

——原書房 2008年9月

定価3,200円(税別) 320頁——

(常務執行役員 小畑秀樹・おばた ひでき)